



18台のi+hubを、目的ごとの用途で活用

東芝情報システム株式会社

18台のi+hubを導入された東芝情報システム株式会社。

導入の経緯や今後の活用について、本社の総務部門所属の西様にお話を伺いました。

課題

1時間程度の余裕が必要となる、大規模会議のための会場設営

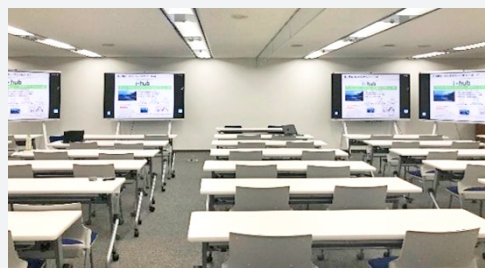
キックオフ等の全社イベントは、最大100名程度収容可能な会議室を2部屋連結した会場で開催しています。これまでは、会場での資料の投影にはプロジェクターとスクリーンを使用していたので、会場設営の際には床下に配線しているHDMIケーブルとプロジェクターを接続していました。

ただ、設置ポイントの床からHDMIケーブルを引き上げてプロジェクターと接続する作業や、投影の大きさや焦点を合わせる作業等があるため、会場設営に1時間程度余裕を持たせておりました。

解決策 1台のPCからの資料投影を、 無線接続で複数に対して行えるi+hubの導入

プロジェクターとスクリーンの組み合わせから脱却したいと考えたのですが、モニター1台だけでは参加者全員が資料を見ることができません。そのため、1台のPCから資料を複数台のモニターに投影できるもの、そして、無線化できるものを探していました。今回i+hubを紹介いただく際、実機を使ったプレゼンテーションをしていただいた結果、弊社が持つ多くの課題をクリアできると判断しました。

4台のi+hubの導入後は、会場設営にかかる時間が半分以下になりましたし、配線の取り回しの必要がないため、安全でスマートな会場を実現できました。



i+hub標準搭載アプリから
4台のi+hubに同一の資料を表示

DX推進への貢献と、間接業務の負担の削減 目的ごとの用途に対応するi+hub

弊社は採用に力を入れております。最近、教育向け専用の部屋を新たに2部屋用意するにあたり、インターンシップや社員教育の場、特にグループディスカッションなどで使用していたホワイトボードを電子化することでDX推進に貢献できると判断しました。

各部屋にはi+hubを4台ずつ計8台導入させていただきました。こちらは今後対象とするグループ・人数が増えればさらに導入を検討していきたいと考えております。



グループディスカッション時の配置

来訪者をお招きできる共有会議室(6部屋)には、これまで一般のモニター(65V)を導入しておりました。

ただ、部屋のアレンジなどが原因でモニターが破損してしまう事象が発生すること、オンライン会議開催時のスピーカーフォンの貸し出しや、ホワイトボードのメンテナンス、ペンの補充といった間接業務が発生することが課題となっておりました。

i+hubはタッチパネルであることが前提で作られているため一般のモニターより頑丈に作られていることが確認できていました。

また、i+hubにはマイク・スピーカー・カメラが内蔵されており、オンライン会議を実施する際の機器貸し出しが不要となりました。そして、電子ホワイトボードを活用することで、メンテナンスやペンの補充など間接業務の負担を大幅に削減できました。



弊社では、i+hubを運用するにあたりルールを設けました。

i+hubはOS制御になっているため、シャットダウンからの立ち上がりに1~2分程度の時間がかかってしまいます。会議のたびにi+hubをシャットダウンしていると立ち上げに時間がかかることがストレスとなるため、スリープ運用を推進することにしました。

また、共有会議室はホールや教育部屋と違い、不特定多数の方が入れ替わり使用することになるため、簡易的なマニュアルを用意しました。現在も多くの方に利用してもらっていますが、運用時の問題や障害の報告は上がってきておりません。

今後の活用 電子ホワイトボードの良さを伝えていきたい



弊社は社員一人ひとりのコミュニケーション能力を高めることを重要課題の1つとしております。i+hub導入後の様子を見る限り、資料の投影やオンライン会議の活用が中心となっています。

まだ電子ホワイトボードの良さを伝えきれていない部分があります。

手書きの良さ、創造性を高め、直観的に情報を伝えることができるのが電子ホワイトボードの良さでもあるので、i+hubを今以上に活用できるように進めたいと考えております。

東芝情報システム株式会社

【業種】システム開発

【企業概要】東芝グループの一員として、組込み機器向けのエンベデッドソリューション、および LSI 設計の受託開発を主に手がける。



株式会社イグアス ビジネス開発本部 戦略システム開発部



ihub@i-guazu.co.jp



<https://www.i-guazu.co.jp/lp/ihub>